

R7 年『余子公民館講座 みなトーク』各グループからの意見

令和7年12月20日(土)

- 境総合の中で余子地区の祭りを開催し、それに参加してもらう。二中の中で余子地区のイベントを開催
- 体育館を開放する。子どもを連れてくる親御さんがいて遊んでいる。月一でもいいので、体育館を開放してみる。体育振興会でやってみては。「開いてる」という場を提供。小学生は放課後子どもタイムがある。高校生はマック。中学生が集まれる場所、例えば公民館の一室を開放して(責任者を置く)自由に使ってもらう。まず、そんな場を作る。
- 居場所は大事。先生だけ、地域の人だけでなく、親御さんも含めて場所の提供ができることが望ましい。信頼関係をどうするか。
- クロムブックのアンケート機能を使って希望を聞く。イベントを開いてもらいたい。市民運動会の後に直来をすると盛り上がる。シグマ(一中)がイベントをやっている(三中の発展)。大人と子供の交流の場所を作る(みなとテラスとか)。地域のイベントが良くわからない、という意見がある。子どもに伝わってないのでは。小学校と中学校の違いがある。小学校は大人のおぜん立て。中学生は子どもが主体的に動く。
- 生徒が地域に出るきっかけについて。今日のような「顔を知るためのイベント」には生徒は出にくい。三中がやっている模倣でもいいので、公民館にブースを作って生徒を呼ぶとか。何にもしない合宿も面白い。小学校の運動会に出て役割分担をする。→面白い、楽しいと思えるのが一番。子どもたちが企画、計画をする。先生も手出しをしない。資金については、公民館や自治連から出す。まず、公民館まつりからやってみる。
- 子どもたちがやりたいことを持っているが、共有する場がない。中学校で話すと言っても実現しにくい。地域でできそうなところに組み込んでいけば？子どもたちが意見を言うところがないのでは。学校ではないところに発信をする機会を作る。
- 何かやろうと思うと、親も大変。企画が大きくなると負担も大きい。あまり負担がなく、親にも負担がかからないようなもの。参加すると親同士も顔見知りになれる。
- 子どもたちがいろいろな意見があるということを知れたのがよかった。
- 渡小学校の校長先生の「てごしよい」という企画に行ったら子どもと仲良くなった。5分でも、面と向かって話をする機会があるといいのでは。中学生から「公民館に行くきっかけがないから、居場所を作って欲しい」という意見があった。
- 子どもが一人でしかいられないという状況を作るのはいけない(自分で選択したのなら OK)。居場所を提供できるような仕組みづくりが必要なのでは。公民館に対しても居場所を求める声がある。居場所として利用するための手段などについて、情報発信も必要。保護者等とも信頼関係を構築することが重要。集まって話せる場が必要。このような場を広げていきたい。
- 誘っても誰も来なかったら寂しいと思うが、誰も来なくても、やらないことには始まらない。「そこに行けば必ずあの人がいる」という発火点みたいなものが何をやるにも必要なのでは。そういう場を作りたいからやりたいという人がいれば、チャンス上げる。一人でもそんな人がいれば、チャンスが得られるコミュニティをつくる。

- 学生は意外とイベントに参加したいと思っている。でも、イベントがあるということが伝わっていない。公民館は、中高生にとって「居場所じゃない」感がある。大人の顔が見えない。知らない場所というイメージ。公民館職員さんが SNS で踊っていたら行きやすくなる。子どもが多い場所に大人が出向く。持続性がないと、またゼロスタートになる。小さくても毎月参加したりしなかったり選べるイベントがあるといい。自治会や PTA も参加しづらくなっている。大人がそうなら子供も一緒。制約がありすぎるコミュニティには参加しにくい。そのハードルを下げる工夫が必要。毎月おやじが普通に集まるような会があればいい。行きたくないものに無理に行っている大人の姿を見ていたら、子どももハードルに感じる。楽しく活動する姿を見せることが必要。役割を省き、参加しやすくする。子どもが集まる場も同じ。まず、つなげる場を作る。召集の有志を集めて、子どもたちがいる場に大人が出向き、「こんなイベントしてるよ」というプレゼンをする。定期的に子どもたちの前で発信する。
- 今日話をまとめたものをあちこちで広報する。